

六十五 園丁と蝶の対話 「認識と言語を巡って」その十一

莊周 君に連れられての認識と言語を巡る旅も一巡りして、そろそろ一段落のところまで来たように思えます。

園丁 そうですね。余力も失われてきましたから、今日は、なんとか区切りをつける話をしたいと思います。うまく運ぶようにまた助力をお願いします。

出発のときには、用意もないのに言語についても具体的な議論ができたらと希望を抱いていましたが、それはあきらめましょう。でも、認識に言語をからめて考えたとすれば、ワイトゲンシュタインのことを外すわけにいかないと思いますので、ちょっとだけ触れながら、議論の出口を探したいと思います。

学生時代から工学の道に進んでいたワイトゲンシュタインは、数理論理学のラッセルの下で哲学を学ぶようになると、科学時代にふさわしい哲学的考察に努めました。著書『論理哲学論考』は、哲学の重要問題を、論理的な力をもつ「言語」で明確に論じています。従来の形而上学を引きずる哲学とは一線を画す著作の一つとなりました。ワイトゲンシュタインは、それを一つの達成と考え、一時哲学から離れました。ところが、の

ちに哲学に帰り、死後に残された論考を読むと、彼は、先の論考が人間の事象をとらえられていないことを自覚したようです。そのことは、この対話の「その四」ですこし議論しました。そこを、僕も読み返す必要がありますけれど。

「莊周 その議論を繰り返すのではないでしょうね。」

「園丁 ええ、繰り返しではありません。でも、ウィトゲンシュタインを再度議論しなければならぬことになりました。いかにも知っているような口ぶりで『論理哲学論考』のことに触れましたが、じつは、それを読んだように思っていたのはまちがいでした。書棚を探しても見つからなかったのです。僕はなんとかつな人間なのでしょう。冷や汗をかいて岩波文庫を買い求め、読んで、その議論に感銘を受けました。」

「莊周 おやおや、事態は急変して、今日も一苦勞の問答をするのですか。」

K 人間の世界認識

「園丁 お許しください。しかし、『論理哲学論考』は、本人が思ったとおり、哲学史を画する一つの達成だと思えます。十八世紀後半、カントは、同時代の哲学者の誰よりも力学に代表される科学を理解して、近代的な認識論を構築しました。二百年以上たった二

十世紀前半、ウイトゲンシュタインは、自然科学の発展を正しく受けとめ、哲学から形而上学的な夾雑物を取り除いて、たいへん整理された世界像を記述しました。

『論理哲学論考』は、議論すべきことを大きく六つに分けて番号づけ、それぞれの先頭に中心となる命題を掲げ、それに関連する論点を何段階かに細分化し分節番号のついた補助命題の形に整理して論じていきます。まるで、数学で基本定理を示して系を展開していくような書き方です。この書物はカントの註解書とはまったく違うものののに、僕は、特に最初の三つの命題群の箇条の多くがカントの認識論の優れて現代的な註解になっている、と感じました。『論理哲学論考』は、僕たちがベイス・キャンブにしようとした決めたカントの認識論を正統に継承している、と考えます。もちろん、カントからの前進があります。現代にふさわしい世界認識についての著作なのです。今日それについて議論するのは、僕たちの対話を締めくくるのに大いに役立つと思います。

莊周 君がそう言うのなら、聴きましよう。それにしても、この書物はたしかによく整理された簡潔な命題を語りますね。スピノザさんにしろウイトゲンシュタインさんにしろ、ヨーロッパの人は論理的で体系的に議論を組み立てるのがうまいですね。それは、そういう文化・言語空間がヨーロッパにはあるということでしょうね。

園丁 莊周さんときどきモダンな言い方をするのですね。それでは、僕たちの議論に係る命題に注目しながら、具体的に考えていきましょう。

莊周 そうしましょう。さて、冒頭の第一は「世界は成立していることからの総体である」で、続く一・一は「世界は事実の総体であり、ものの総体ではない」ですよ。すると、君がカントの「唯物論的」解釈を強調するのは度が過ぎていませんか？。

園丁 そうですね。もともと、カントは「唯物論」を主張していません。しかし、二十世紀の後半になっても、世界を意識に収束させようとする議論があったし、現在でもその流れの主張があるので、モノを解消しない立場を鮮明にするために強調したのです。けれども、ワイトゲンシュタインの『論考』が広く受け入れられるところでは、唯物論的という言葉を使わなくてもよいのです。第二の命題は「成立していることから、すなわち事実とは、諸事態の成立である」で、それに続く〇一は「事態とは諸対象（もの）の結合である」と言いますから、世界に対象すなわちモノがあることが前提です。「ものの総体ではない」は、ただモノだけがあっても世界は構成されないという意味です。諸対象が特定の仕方で互いに関係してつながることによって、世界は構成される、つまり諸事態に構造があつて、事実にも構造があるのです。デモクリトスが原子論を提唱したときから、唯物論はそのようなモノのあいだの関係・構造を想定していたのではないで

しょうか？。

莊周 なんとか切り抜けましたね。

園丁 命題一および関連する諸命題と命題二に添えられた文は、実在的な世界を受け入れる世界観を表明したものとと言えます。

莊周 うーん。『論理哲学論考』の命題を、単に考えを表明したものと言うのは語弊があるでしょう。ウィトゲンシュタインさんは、この書物をまとめたとき、それら諸命題は現実を最大限に論理的に表現したもので、これ以上最善の世界像はないと考えたのですからね。わたしにも、現実の世界を表現するのに、これ以上適切に論理を組み立てることはできません。…うん、今日はわたしも力が入っています。

園丁 助けてほしいものです。

園丁 第二の論点は、実際は、二・一の「われわれは事実の像をつくる」で始まります。これはつまり、人間の認識がどういうものかを論理立てて整理するという宣言です。

二・一の補助命題は、「像は現実に対する模型である」と始めて、数学的・自然科学的な厳密な言い方で、像が世界から何を写しとるのかを言おうとしています。「像の要素は像において対象に対応する」、「像は、その要素が特定の仕方に関係するところに成

り立つ」、「∴、ものが同じ仕方で互いに関係していることを表わしている」や、構造という言葉が出て、像つまりわれわれの認識が、現実にあるモノの関係・構造を把握できることを当然とします。そして、「像は現実に到達する」のです。それができるのは、モノの関係と像の要素の関係は写像関係にあり、像が現実と論理形式を共有するからです。この部分をしめくくって、二・一・九「世界を写しとることができるのは、論理像である」という命題がきます。「像はその描写対象を外から描写する」という文があることに注意すべきでしょう。人間が世界を認識しようとしている、と言ってよいでしょうか。

莊周 たしかにここは、カントの認識論を煮詰めて普遍化した表現になっていますね。

園丁 このようにして、僕たちは写像によって現実に到達できるのです。しかし、「ア・プリオリに真である像は存在しない」ので、「像の真偽を知るためには、像を現実と比較しなければならぬ」のです。ここのもカントの立場と同じだと思います。カントの言い方だと、理性はあくまでも認識を遂行しようと思いますが、経験を超えて知ることはできません。

莊周 そうですね。踏み超しをしないようにするには経験による裏づけが必要です。

園丁 ウイトゲンシュタインは、論理的な命題を積み重ねて、しだいに体系をつくっていきます。命題三で「事実の論理像が思考である」と宣言して第三の論点「思考」に分け入り、認識を遂行する思考というものを諸命題に表現することを怠りません。最初に、「真なる思考の総体が世界の像である」、「論理に反することを言語で描写することはできない」と確認して、三・一が「思考は命題において知覚可能な形で表わされる」と表明しますから、思考によつて世界の論理像が写しとられ、それは言語で命題の形に描写されることになります。ここでは、言語が論理的なもので知覚可能なことも言われていることになります。前回まで僕が言語を巡って考えたことは、ウイトゲンシュタインの思考についての諸命題を、神経回路網にからめて理解しようとしたものだ、と言えるでしょう。

莊周 まあ、そういう努力ではありました。

園丁 思考を命題と言えれば、思考の論理構造があらわになります。まず、「命題に含まれるのは意味の形式で、内容ではない」に続いて、「命題は語（名）の寄せ集めではない」、「意味を表現しうるのは事実だけ」と書いてあります。思考や命題が示すのは何でしょうか。三・二には、「思考に含まれる諸対象に命題記号の諸要素が対応する」とあり、以下に、「名は対象を指示し、命題において対象の代わりをする」、さらに、

「命題はただものがいかにあるかを語りうるのみで、それが何であるかを語ることはできない」と追加されます。ここに、訳者野矢茂樹さんが、「命題は名だけからなり、内外の構成要素をもたない。これは、事実が対象以外の構成要素をもたないことに対応する」と註をつけています。すると、諸対象のつながりが成立している事実が意味を表現するので、命題の諸要素のつながり方（形式）にだけ意味があるということでしょうか？。三・三は、先ほどの文に矛盾するように見えますが、「命題のみが意味内容をもつ」と宣言し、「表現はそれゆえ、変項を用いて関数として表される」とします。命題がもつ意味の内容と言えるのは、やはり、関数、したがって関係ということになるでしょう。この辺は、物自体は知られなくて、事象にある関係を認識するのだと言っていて、カントの据えた認識論の基本は変更されていない、と思います。僕がこの理解でいいでしょうか？。

莊周 はい、そう思います。

園丁 今日ははっきりした返事をいただきました。ありがとうございます。

莊周 君の夢の中で君が思索をめぐらすことに感化されたようです。

園丁 四が「思考とは有意味な命題である」と思考を命題で定義して、すぐに、「命題の

総体は言語である」として、四番目の論点は言語で表現される命題に移ります。ここに添えられる「日常言語は、人間という有機体の一部であり、他の部分に劣らず複雑である」という言明は、言語が生物としての人間のうちにあるという僕のとらえ方を認めてくれます。「すべての哲学は言語批判である」は、ウイトゲンシュタインの哲学的関心が向かうところをよく示しています。

莊周 ほんとうにそうですね。実際、哲学者の議論で印象に残るのはよく真相を言い取った言葉です。その言葉は意味深い命題になっています。

園丁 さて、「命題は現実の像である。現実に対する模型であり、それによって現実を想像する」と、先ほど言われたことと同型の言葉が続きます。すなわち、レコード盤、楽曲の思考、楽譜、音波、これらはすべて互いに、言語と世界の間で成立する内的な写像関係にある、と。ここで僕は、ソシユールの言語論との相似性に思い至りました。言語は、ソシユールの言うように、恣意的な記号です。しかし、楽譜は見たところ音楽の像には見えず、アルファベットも発話の音声になっているようにには思われないけれども、像であることの本質へと踏み込むならば、「記号は明らかにそれが表わすものの似姿である」とウイトゲンシュタインは言います。なぜなら、「それらすべてに論理的構造が共通している」から、と。

命題ということに注目すれば、「命題は現実がもつ論理形式に従って現実を記述する」、言い換えると、「命題は、論理的足場を頼りに世界を構築する」のです。論理形式は保たれて、「命題の構成要素だけが翻訳され」、「その構成要素が理解されるとき、命題が理解される」ことになります。

「「命題は状況と本質的に結びついていなければならない」のですが、「状況はいわば実験的に構成される」にすぎません。しかし、「記号が対象の代わりをするという原理に基づく」という「命題の可能性」が、「状況に対する論理像」を構成可能にする、と僕は理解しました。僕は、神経回路系に踏み込んで考えても、言語を用いる思考の不思議に感心するばかりでしたが、ウイトゲンシュタインの文章もその秘密を明らかにしているとは言えないと思います。論点第四の最後に、命題四・五が「ひとが予見不可能な（すなわち構成不可能な）命題など存在しない」と表明しますから、言語のもつ論理の構成力がそれを可能にするということでしょうか。

莊周 君によく理解できないところがあるですね。

園丁 もちろんそうです。その先は視界が開けます。「命題は事態の成立・不成立を描写する」（四・一）のですから、「真な命題の総体が自然科学の全体（あるいは諸科学の

総体）である」ことになります。認識論が支えようとするのは、科学ということになります。「哲学は自然科学の議論可能な領域を限界づける」、「哲学は思考可能なものを境界づける」とも言っています。僕の前回までの議論はそういう領分にかかわっていたと思います。哲学は「自然科学ではなく」、その目的は「思考の論理的明晰化」にあるのです。「哲学の成果は哲学的命題ではなく、諸命題の明確化」なのです。ほかに、「哲学は学説ではなく、活動である」、という言葉がありました。カントが「哲学を学ぶことはできない」、「哲学するやり方を学ぶことができるだけだ」というようなことを言ったのに通じますね。

莊周 ここでも、君は、ウィトゲンシュタインがカントの正統な継承者だと言いたいのですね。

園丁 先ほど立ち止まったことの答えになるのでしょうか、「命題の意味とは、事態の成立・不成立の可能性と命題との一致・不一致である」とされます。そして、言葉をずらしながら同じ文型、「要素命題は名からなる。それは名の連関、名の連鎖である」、「要素命題が真ならば、その事態は成立している」が続き、「すべての真な要素命題の列挙によって、世界は完全に記述される」と宣言されます。僕たちは、これ以上のことを期待してはいけないのです。

四・四には、「命題が自分自身について真であると語ることとはできない」とあります。

これは、ゲーデルの不完全性定理に当たるでしょうか？

莊周 さあ、わたしにも判りませんが、論理を問い詰めることでそういう結論が導き出せるのですね。兜を脱ぎます。

園丁 いつもの莊周さんらしくなく、今日はすなおですね。

莊周 わたしは、ずっと昔からそうでした。

*

園丁 話が長くなっています。なんとか簡潔に話すように努めます。

第五の論点の提示は、五「命題は要素命題の真理関数である」と確認して始まります。

ところが、その真理関数は僕たちの欲しい真理を断定してはくれません。論理学を究めたワイトゲンシュタインは、冷徹にそのことを述べます、すなわち、「現在のできことから未来のできごとへと推論することは不可能なのである」と。僕たちは、因果の連鎖を信じていることができるだけです。むしろ、「未来の行為をいま知ることとはできない」から、「ここに意志の自由がある」のです。

四・二は「諸命題の構造は互いに内的関係にある」として、そこに内的関係があるのは、ある基底の命題に操作を施して次の命題が構成される、というやり方で諸命題がつくられるからです。操作は「諸命題に対する論理的構成の始まるところに登場する」と言われていますから、操作とは論理的構成ということになるでしょう。その操作は、「形式を(まるごと)特徴づけるのではなく、ただ形式の差異だけを特徴づける」、そして、「操作の結果だけが語るのであり、それは操作の基底に依存している」ととらえています。そこで、真理操作が先ほどの真理関数に当たります。命題五・三は、命題五を操作して、「すべての命題は要素命題に真理操作を施した結果である」となります。僕は、「差異」という言葉やほかの言葉のニュアンスに、ソシユールに始まる構造主義と同根の考え方を感しました。ウイトゲンシュタインの考察の根本には言語があるのですから、ソシユールが言語研究で見出したものと同じ論理形式があるのは当然なのでしょう。

命題はいくつかの構成要素から成る「論理文」に構成されていて、その「変換」によって諸命題がつながっている、と僕流に言えば、ここで挙げられる諸命題は、認識と言語を神経回路系を基に考えた前回までの議論につながります。そこでは、神経回路系は論理回路であり、言語の運用あるいは言語を用いる思考は、その論理回路で情報を変換することによってなされると考えました。ここでウイトゲンシュタインの言っているこ

とは、僕の考えた「外界から知覚した要素となる情報を論理回路で操作して、一つの論理系に構成し、対応をする」という認識というものを、整然とした命題に表現していると考えられませんか？。

莊周 また、牽強付会ですか……。いや、対応関係があることは認めましょう。

園丁 図に乗って言えば、「知覚可能な形で表わされる」や「われわれの記号言語においてすべてがうまくいきさえすればよい」などの言葉に、僕の表現に似たものがあると思います。五・四七の「要素命題のうちに、すでにしてあらゆる論理的操作が含まれる」、「構成されたものがあるところには、入力項と関数がある」という言明も、知覚の神経回路系のこととして理解が可能です。「言語自身があらゆる論理的誤謬を避ける」も、「論理がア・プリオリだというのは、論理に反しては思考不可能ということ」も、言語を用いる思考の回路系が基礎にあるからだ、と考えることができます。

僕の考察はまったく初歩的なもので、すでに深い研究があるのかもしれませんが、生物学的な神経回路系の研究によって、将来、ウィトゲンシュタインの諸命題を、事物についての科学的記述と関連づけて理解する方向がもっと開けてくるのではないでしようか？。

莊周 君の「蝶の雑記帳三十九」は漠然としたものだけれど、チョムスキーの生成文法論

は言語についてそういう方向への転回を告げるものだ、と考えていますね。

園丁 はい。人間は、外界に対してだけでなく、自分の身体の内面まで科学的探究の対象にして、それを知ろうとしている、少なくとも記述しようとしているのです。僕たちの対話は、その足場を固めようとするささやかな試みです。

莊周 それに比べれば、ワイトゲンシュタインさんの命題は突き抜けたところがありますね。たとえば、「論理はすべてを包括し、世界を映し出す」と、「論理」が高く掲げられます。「Aはpを信じている」、「Aはpと考える」、「Aはpと語る」は、もとをたどれば、「「p」はpと語る」という形式となるのです。うかつな人は、世界にまづ「論理」があると言っているように聞きます。

園丁 ええ、しだいにとっても力強い表現が現われますね。今あなたの言われた論理からして、「魂―主体などありはしない」ことになります。「論理によって決定される問いは、論理のみによって決定されねばならない」から、「論理を理解するために必要な「経験」は、何かがかくかくであるというものでなくてよく、何かがあるというものでいい」のです。しかし、論理だけあればよいと言っているわけではありません。「世界が存在しないとしても論理がある」というのだとすると、世界が存在するときにどうして論理があり

える」でしょうか。世界の實在を放棄することはしないのです。「経験的實在は対象の総体によって限界づけられ」、その「限界は要素命題の総体において示される」のです。

論理が世界を映し出すとすれば、命題五・六が言うように、「わたしの言語の限界がわたしの世界の限界を意味する」ことになります。言語の限界は論理の限界で、思考の限界でもあります。僕たちの考えによれば、人間の神経回路網がその限界を定めるのです。その限界を超えて語ることもできません。カントが超越を戒めるのはこのことに關係している、と思います。

莊周 それなら、人間がどこまでも言葉を連ね、推論を重ねていこうとするのはどうしてですか？。

園丁 カントは、超越的存在と非存在を論じるような命題が二律背反に陥ることを示しました。それはつまり、論理的に破綻するということです。ウィトゲンシュタインの言い方では、可能性として事態が考えられても、事実として成立しえない、ということだと思います。そして、「われわれの経験のいかなる部分もア・プリオリではなく」、「像の真偽を知るためには、像を現実と比較しなければならぬ」のです。要素命題を与える対象が限界を画し、経験が真だと告げないことを語ってはいけません。

ここには、「世界は生とひとつである」、「思考する主体は存在しない」、「世界の

どこに形而上学的な主体が認められうるか」とあって、生という言葉が生物としての存在に触れています。ウィトゲンシュタインは思考が思考している、と言っているように思います。これらの文は、以前に意識が存在しないことを議論したこととつながっていると思います。神経回路網を考えても思考の座を見つけることはできない、と僕たちは考えました。

莊周 しかし、「わたしの理解する言語がわたしの世界の限界を意味する」、五・六三「わたしはわたしの世界である」などの文章は、「わたし」を強調すれば、わたしの特異性を主張している、と解釈することが可能です。実際、訳者の野矢茂樹さんの「解説」は、どれだけのことが考えられうるかは、わたしがどのような事実を経験しているのかに決定的に依存する、と言って、わたしと異なる経験をもつ他者を登場させ、異なる論理空間をわたしの論理空間のうちに位置づけることは不可能である、としますよ。

園丁 そうですね。でも、ウィトゲンシュタイン研究者の野矢さんは、『哲学探究』などの遺構に登場する後期のウィトゲンシュタインに親しんでいるので、そういう解説をしたのだと思います。あの延々と続く問いかけは、たしかに、「わたし」の世界という言葉が開く論理空間へ入って行って生まれたのでしょうか。しかし、すぐあとの命題五・六四は、「独我論を徹底すると純粹な実在論と一致することが見てとられる。独我論の自

我は広がりを欠いた点にまで縮退し、自我に対応する実在が残される」と結論します。『論理哲学論考』を書いたとき、ウィトゲンシュタインは、世界―思考―命題の体系をうまく整理できたと考えていたのです。僕も、彼のこれらの諸命題が、認識と言語を把握するのによく整理された体系だと考えるので、ここでこれだけ丁寧に議論しているのです。僕の思索の大部分は、すでに『論理哲学論考』に与えられていたわけです。もちろん、ウィトゲンシュタインがしたように、この整理から出発してさらに考察を続けなければならぬのですが。

莊周 君はそういうふうにとめるのですか。それで君の議論は補充されましたか？。

園丁 そうであることを希望します。

莊周 『論理哲学論考』には、六番目の論点がありますが、それは論じないのですか？。

園丁 ああ、論理学が直接に顔を出しますから、僕には難しすぎます。

莊周 それでも飛び抜かすわけにはいかないでしょう。

園丁 僕がもつとぼろを出すのを期待するのですか。仕方ありませんね。命題六・一はいきなり「論理学の命題はトートロジーである」で、続いて、「論理学の命題は何も語らない、分析命題である」ですよ。ウィトゲンシュタインは、論理をあれほど尊重するの

に、論理に余計な期待を抱かないのです。「論理は記号を本質的に必要とし、その記号がもっている本質的特性それ自身が、自らを語るのである」と言います。それは、「論理命題の証明とは、一定の操作をくりかえし適用することによって、当の命題を別の命題から作成することにほかならない」からなのです。僕にはやっぱり、これらの主張は、神経回路系が論理演算を行なうことの言い換えのように思えます。「論理学の命題は、いずれも、記号で表わされた推論図式にほかならない」という文も、僕が神経回路図は数理論理学の略図と見なすことができると言ったのに符合します。論理学の命題は何も語らないので、「論理学は学説ではなく、世界の鏡像である」ということになります。結局、認識とは世界を写しとることなのでしょう。

莊周 しかし、人間は、認識して何事かを為す者ですよ。人間の得る命題は何事かを語るのではないですか？。

園丁 そうですねー。そこに「論理は超越論的である」という言葉があります。論理は自分自身の支えを「超越論的」という言葉に託しているのです。 「命題は自分自身が真であると語れない」のですから、ここには、カントのしたような原理の要請があるのですよね。

そう考えれば、このあと、カントに近づくようなことが語られます。「論理学の探求

とは、法則性の探求にほかならない」とします。「論理学の外ではいつさいが偶然である」、「因果法則とは法則ではない。法則の形式である」とことわっておいて、「物理学においては、いくつもの因果形式の諸法則が存在する」と言い取ります。「ひとは、なんらかの最小作用の法則があるに違いないと予感していた」、「ア・プリオリに確実なものは純粹に論理的なものと分かる」というような言い方で、現実を受け入れるのです。「われわれは一つの保存法則をア・プリオリに信じるのではない。一つの論理形式の可能性を、ア・プリオリに知るのである」と言われますが、これはやはり、カントの要請である統整の原理の言い換えだ、と僕は思います。以下の理由律などの考察のところは端折りますが、その終わりのところに、「たとえ欲したことすべてが起こったとしても、いわば単なる僥倖にすぎない。意志と世界の間にはそれを保証するいかなる論理的連関も存在せず……」という感慨のような言葉が置かれます。僕たちの言葉づかいをすれば、これは「断念」ではないでしょうか。

莊周 それは我田引水でしょう。君に語りえぬものについては、沈黙しなければいけません。

園丁 ああ、あなたは、ウィトゲンシュタインが倫理的な問題を考えようとしたところを飛び抜かして、七番目に一行だけ提示した命題を言っていました。

莊周 君は、意味や価値を主要問題としたフッサールの議論を退けたじゃないか。ウイトゲンシュタインさんも、「世界の意義は世界の外になければならない」、「価値もまた、生起するものたち、かくあるものたちすべての外にある」と宣言します。それを確認する必要が君にありますか。

「神秘とは、世界があるということである」。わたしは、この言葉はとても味わい深いと思います。道元さんも似たようなことを言いましたよ。

「語りうること以外は何も語らぬこと、——自然科学の命題以外は」！

園丁 恐れいりました。

